

非小細胞肺癌において、細胞増殖や生存を誘導するいくつかの遺伝子(ドライバー遺伝子)の変異ががん化に密接に関係することが近年の研究により明らかとなり、ここ数年の間に様々な分子標的治療薬が目まぐるしいスピードで開発・承認されました。EGFR 遺伝子変異がドライバー遺伝子全体のうち 40~50%を占める一方で、その他の遺伝子変異は陽性率が数%程度と頻度が低いにも関わらず、検査費用が高額であることや検査ごとに検体が必要で微小検体では検査の実施が困難であることなどの問題が挙げられます。

当センターでは、EGFR 遺伝子変異検査(cobas 法)後の残余 DNA を用いて、高解像度融解曲線分析法による BRAF,HER2,c-MET 遺伝子変異のスクリーニング検査を実施し、得られたデータは当該診療科(呼吸器内科・呼吸器外科)に参考値として報告しています。LDT(自家調整検査法)のため、治療法選択にあたっては臨床医の判断に委ねています。

研究事務局担当者 兵庫県立がんセンター検査部 南 智也